

<様式>

学 校 名	山形市立蔵王第二小学校	校 長	鈴木 章人
		研究主任	吉田 祐佳
研 究 主 題	思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成（3年次）		
研 究 主 題 設 定 の 理 由	<p>変化の激しい現代社会の中で、自分の良さを認識し、高い志をもって意欲的に物事に取り組んだり、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓いたりする力を身に付けることが求められている。その時代に求められる資質・能力を身に付けるために、生涯にわたって学び続けるためには、知識や技能の習得のみではなく、「何のために学ぶのか」「どのように学ぶか」という課題に向き合い学びの質を高める指導方法を吟味していく必要がある。</p> <p>本校では「あかるく かしこく ねばり強い蔵王の子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、「自分も相手も大切にする子ども」「主体的に考え行動する子ども」「仲間とともに磨き合う子ども」の育成を目指している。その具現化のために、「分かった」「できた」が実感できる授業や、自己の成長を実感できるような授業づくりに取り組んでいるところである。</p> <p>【令和3・4年度の研究について】</p> <p>令和3年度より、「思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成」を研究主題とし、【思いを互いに伝え合う子ども】【学びを高める子ども】を目指す子ども像として実践を積み重ねてきた。令和3年度は副題を「確かな子ども理解に基づく授業づくり」とし、「課題づくりと振り返りによる自己の成長の自覚」「教師力」「学習を支える土台づくり」の3点を授業づくりの柱として研究を進めてきた。令和4年度は副題を「振り返りの蓄積による深い学びの実現」とし、「学習の見通し」「考えをもつ」「交流」の3点を授業づくりの柱としてきた。副題にある通り、子どもが自分自身の学びの振り返りを繰り返してきたことで、子ども自身が、思いを互いに伝え合うことの良さや自身の学びの高まりを意識するようになってきている。</p> <p>&lt;授業づくりの柱について&gt;</p> <p>目指す子どもの姿に迫るために、授業づくりのときに大切にしたいことを柱として授業づくりを行ってきた。事後研究会では、目指す子どもの姿に迫っていたかを授業づくりの柱をもとにしながら話し合う。指導法等に注目した話し合いではなく、目指す子どもの姿に迫っているかをもとに話し合うようにする。</p> <p>&lt;指導案（授業デザインシート）について&gt;</p> <p>実践を積み重ねていく中で、令和3年度の途中から指導案の形式を変更した。子どもの思考の流れを意識して授業を組み立てるために、板書計画を中心にした形式にしたことにより、本時で押さえるべきポイントを明確にすることができた。また、授業を参観する側からも、本時の流れが見やすい形式にしている。</p>		

**【今年度の研究について】**

今年度も、単元で学ぶことの重点を焦点化したり、めざす子ども像をもとに学年ごとに中核になる教科（国語、算数）を中心に据え、派生させながら学びを広げたりする中で、振り返りを大切にしていく。振り返りにおける、①「わかった」「できた」という事実や知識の確認 ②「前と同じように」「つぎも使えそう」という関係性や一般化の生成 ③「考えが変わった」などの自己変容の認識や「～さんの考えを聞いて」といった他者との比較は、深い学びの実現に大きく関わるものである。このように振り返りを蓄積していくことにより、子ども自身が中・長期的に学びの高まりを実感することができ、学びがより豊かになっていくものと考えている。これらのことから、研究主題を設定し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進しながら、子どもたちに必要な資質・能力の育成に向けて研究を進めていく。

「思いを互いに伝え合い」、学びを振り返ることで、「学びを高める子ども」をめざす。

**【思いを互いに伝え合う子ども】**

国語	算数
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えをもち、自分なりの方法で表現する。</li> <li>叙述をもとにイメージを膨らませる。</li> <li>文章の中から理由をみつける。</li> <li>主語、述語を捉え、文章の内容を理解する。</li> <li>相手意識をもって伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>図や式、表、言葉など様々な方法で伝える。</li> <li>わからないときに聞き返す。</li> <li>算数用語を使う。</li> <li>根拠を明らかにして伝える。</li> <li>相手意識をもって伝える。</li> </ul>



振り返りで見つめる。価値づける。

**【学びを高める子ども】**

国語	算数
<ul style="list-style-type: none"> <li>友だちの意見を取り入れて比べたり考え直したりする。</li> <li>友だちと違った意見でも伝える。</li> <li>友だちに質問したり、問い返しに答えたりする。</li> <li>友だちの意見を聴き、多様な考え方を認める。</li> <li>自分と結び付けながら例える。</li> <li>実体験や読書などで得た知識を結び付けながら語彙を増やす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>合理的な方法に気付く。</li> <li>より速く、簡単に、正確に考える。</li> <li>既習を生かして問題をつくる。</li> <li>既習同士をつなげて関係性を見出したり一般化したりする。</li> <li>具体的な生活場面や経験と結び付ける。</li> <li>友だちの意見を聴き、多様な考え方を認める。</li> </ul>

め  
ざ  
す  
子  
ど  
も  
像

研究の内容

めざす子ども像の具現化に向けて、授業づくりの柱をもとにしながら実践を積み重ねるとともに、子どもの振り返りを通して学びを価値づけたり、授業改善につげたりする。

学習の見通し

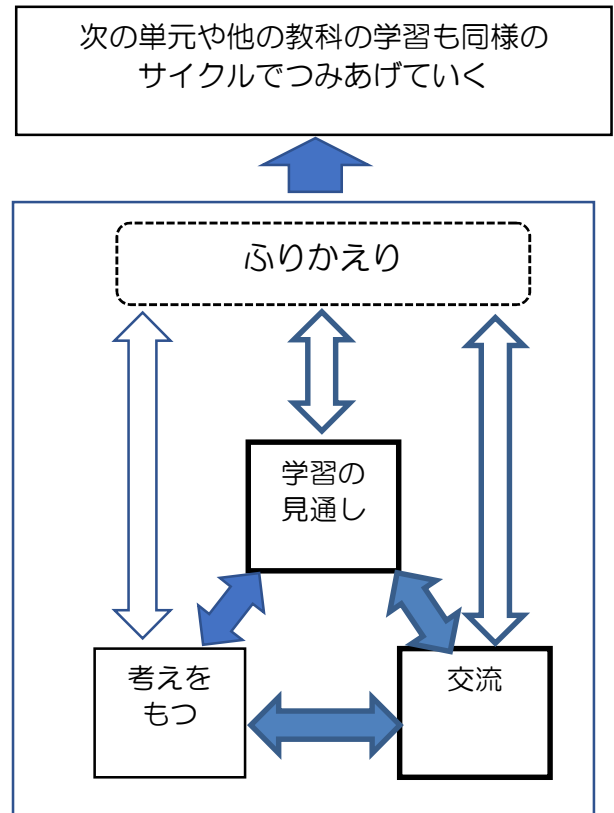
- ・ 年間の見通しをもった単元構成
- ・ 具体的なゴールの姿を共有
- ・ 課題の理解
- ・ 既習との結びつき
- ・ 子どもと一緒に課題づくり

考えをもつ

- ・ 文章や問題の理解
- ・ 発問の吟味
- ・ ワークシートの工夫
- ・ 考えをもつためのステップ（レベル）の共有
- ・ 既習をもとに考える経験の繰り返し

交流

- ・ 教師の出と待ち
- ・ 発言をつなげるコーディネート
- ・ 適切な交流場面の設定
- ・ 話し合う内容や目的の明確化
- ・ 交流のカリキュラムマネジメント



研究の方法

(1) 授業研究会

①研究の教科

低・中・高学年の学年部ごとに国語・算数の2教科に振り分け、授業実践を行う。

②授業研究の進め方

- ・研究主題に基づいた授業実践を行う。
- ・事前に教科部会のメンバーで、構想の会（指導案を書く前）、事前研究会（指導案をもとにして）を行う。  
※授業日の10日前を目安に事前研究会を行い、助言者への指導案は1週間前をめどに提出する。
- ・事後研究会では、2グループに分かれて具体的な子どもの姿や事実をもとに、授業の視点にそった話し合いをする。その後、グループで話し合われた成果や課題を全員で共有する。
- ・教科部会ごとにアドバイザーの先生をつけ、授業研究会にてご指導いただく。
- ・事後研究会日より（A4サイズ1枚に、グループごとの話し合いのまとめ、授業者からの一言、指導助言で出された成果や課題を簡単にまとめたもの）を授業者が作成・配付し、次の授業に生かす。（授業後1週間を目安に）

(2) 校内研修

- ・外部講師を招聘し、課題の共有と教員個々のスキルアップのための研修を行う。

(3) 先進校視察

- ・県内外の先進校を視察し、学んだことを研究に生かす。（オンラインでの参観も含めて）

(4) 研究紀要の作成

- ・授業研究会で実践したことを研究集録にまとめ、次年度の研究に生かす。
- ・実践を振り返って、研究授業だけでなく、その後の単元や他教科の学習でも見られた子どもの成果や課題をまとめる。

研究の計画

日程	予定	内容
4 / 6 (木)	研究推進委員会①	研究概要、指導案の形式
4 / 11 (火)	研究全体会①	研究概要、形式提案、日程、授業研の進め方
5 / 8 (月)	研究推進委員会②	リーフレットについて、夏休みまでの流れ
5 / 22 (月)	研究全体会②	リーフレットの内容、役割、振り返りの蓄積
6 / 9 (金)	授業研究会	5年 算数
6 / 12 (月)		3年 国語
6 / 16 (金)		こまくさ3組 国語
6 / 20 (火)		6年 算数
6 / 23 (金)		1年 算数
6 / 30 (金)		こまくさ1・2組 生活単元
10 / 4 (水)	公開研究発表会	低・中・高・特支の4授業公開
12月中旬	研究全体会③	研究のまとめについて
1月下旬	研究紀要原稿締め切り	
2月	研究全体会④	今年度の振り返り、紀要丁合
2月	研究推進委員会③	次年度の方向性、役割等
3月	研究全体会⑤	次年度に向けて